様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３５０７３４

研究課題名（和文）現代大学生の身体観の検証と身体教育へのアプローチ

研究課題名（英文）The Study on the Concept of Modern Body and Approach to Body Education

研究代表者
松浪　稔（MATSUANMI, Minoru）

東海大学・体育学部・教授

研究者番号：９０３６４１５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題について、雑誌論文4件、図書2件などを発表した。スペイン語でも成果の一部を発表し、ひろく社会に発信することができた。
現代の身体観の起源は、明治期以降の国家によって形成された近代的身体に行きつく。つまりそれは近代システムに適合する身体である。そして現代の身体観はその延長線上にある。そこから抜け出し、グロ-バルな視点をもった身体観が必要とされており、それがポストグローバル社会の身体観につながるであろう。様々な価値観が飛び交っている現代社会だからこそ、われわれは自身の身体に向き合う必要がある。われわれの身体を考えることは、いま、ここにある未来の身体（われわれ）へと続く課題である。

研究成果の概要（英文）：About this research theme, I announced four journal articles and published two books including the articles that refer to this theme. One paper was published in Spanish. The results of research were sent to the society widely.
The origin of the concept of modern body is the perspective of the body that formed in Meiji era to control the modern Japan as nation state which leaded by Emperor. That is the body to adapt the modern systems. Now, it is necessary the body concept with the aspect of globalization. It leads to the body concept in post-global society. There are various senses of value in modern society, so we need to consider what our body is. Thinking about the concept of body is the important theme to our future body.

研究分野：複合領域　健康・スポーツ科学　スポーツ史　身体教育学　身体性哲学

キーワード：スポーツ史　スポーツ人類学　身体観　近代的身体　スポーツボランティア

１．研究開始当初の背景

身体に対するまなざしは多様であり、理想とする身体像も多様である。身体をどのようにとらえるのか、どのような身体を理想とするのかという問題は個々人の身体観によるものである。

平成 9 年 10 月「臓器の移植に関する法律」が施行され、法的に脳死がヒトの死として認められ、脳死からの臓器移植が可能となった。

また、京都大学山中伸弥教授のノーベル医学・生理学賞受賞により「iPS 細胞」の研究が一層注目を集めることになった。様々な細胞になる能力をもった「iPS 細胞」の開発が、今後の医療に大きな影響を与えることは必至である。

医療においては、治療のために他人の臓器を移植するという現実がある。自らの身体に外部から臓器という他者（異物）をとりこむのである。

スポーツの現場ではこのように他者（異物）を身体能力の向上のために身体内に取り込む行為は、現在「ドーピング」行為として厳格に禁止されている。しかし科学技術の進歩は「ドーピング」の定義を揺るがすことになるかもしれない。

いっぽう、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領の目標には「心と体を一体としてとらえ……」と明示されている。つまり「心」と「体」を一体としてとらえることが体育教育の目標として示されているのである。

このように現代社会には、(1) 自らの身体内に他人の臓器（他者）を移植しても自分の身体であるという身体観（臓器移植）があり、(2) 身体内に異物を取り込むことは厳禁であるという身体観（ドーピング）があり、(3) 心と体は一体であるという身体観（体育教育）があるなど、多様な身体観がある。

しかし「死」を迎えた後の身体は治療のために利用可能になるという身体観と、心と体は一体であるという身体観には、大きな隔たりがあるのではないだろうか。これらはすべてわれわれの「身体」に関わる問題である。よって、多様な身体観の間を橋渡しするような、「あらたな身体観」の概念を構築する必要があるだろう。つまり、考えなくてはならないのは、どこからどこまでを自分の身体をとらえるのか、ということであり、「身体の倫理」の構築である。

２．研究の目的

本研究は、現代大学生の身体観を検証し、その身体観を身体教育に反映させていくための思想の構築を試みることを当初の目的とした。そのために、現代の身体観がどのように構築されたのかを明らかにする基礎的文献研究を重視した。

３．研究の方法

(1) 本研究では、まず文献研究により、身体史に注目するスポーツ哲学、スポーツ史、スポーツ人類学の視点から日本人の身体観に関する基本的な思想をあきらかにした。

(2) 現代大学生の身体観を質問紙調査により検証した。

(3) 多様な身体観がある現代社会において身体教育が目指すべき身体観の構築を試みた。

４．研究成果

(1) 研究の視点

「1.研究開始当初の背景」に示したように、現代社会における身体観は多様であり、また、社会の動態、科学技術の変化に大きく影響を受けるものである。本研究実施に当たり、現代社会の状況を鑑みながら当初予定していた研究方法を若干変更した。そうすることで現代の身体観の起源をより明らかにすることができ、また現代社会の状況に対応した身体へのまなざしを明らかにすることができると判断したからである。

まず重視したのは、近代以降どの様な身体観が求められたのか（理想の身体像）を明らかにする基礎研究である。これにより現代の身体観の起源を明らかにした。具体的には「日本における近代的身体観の形成」「否定される身体／近代化される身体」「体罰の起源を探る」をテーマにした一連の研究である。本課題研究の多くの時間をこの基礎研究に費やしたが、研究発表、日本語論文の発表のみならず、スペイン語での翻訳論文の発表、書籍としての刊行を含め、広く社会に研究成果を発信することができた。(「3.研究の方法 (1)」)

また現代大学生の身体観を質問紙で調査した。この調査結果については、本課題の予備的研究（松浪　稔、現代大学生のもつ身体観 －臓器移植・身体装飾・性への意識－、東海大学紀要体育学部 42、2013、33-44）とほぼ変わらない結論が得られる見込みであり、ここでは触れない。(「3.研究の方法 (2)」)

さらに 2013 年 9 月には、2020 年東京オリンピックの開催が決定した。すぐさま社会は 2020 年東京オリンピックに舵を取ることになった。世界最大のスポーツの祭典が日本で開催されることが社会、経済、教育に及ぼす影響は強大であることは明らかである。よって 2020 東京オリンピック開催が社会、身体観に与える影響についても考察を加えることにした。

そしてオリンピック招致とともに実施されている Sport for Tomorrow 政策とその基盤となるスポーツボランティアの実態と可能性について考察した。(「3.研究の方法 (3)」)

(2) 日本における近代的身体観の形成

日本近代の始点は明治維新におくのが一般的である。明治維新によって人々を取り巻く環境は大きく変化したといってよい。明治新政府が目指したのは、国家の独立を守り、

欧米列強（西洋）と肩を並べる強国をつくることだった。そこで明治政府は「富国強兵」の合言葉のもと、西洋から近代的な諸制度や技術を導入した。このような社会、政治、経済制度の変化は人々の身体にも変化をもたらした。これらの制度を支える身体（近代的身体）が必要だったのである。つまり身体の近代化が必要だった。

軍隊や学校などの教育機関は、近代制度を支える身体の養成を目指した。また明治期の少年雑誌の記事から、学校や軍隊以外の場でも、そのような身体の形成を目標としたこと分かる。このような近代的身体は「共同体/共同性」という視点から考察できる。

明治期の少年雑誌の記事は、少年の身体が健康であることを望んだ。それは、兵士として戦える身体を求めたということである。つまり立派な軍人になるための健康な身体を理想とする身体観が、読者に提示されたのである。活字を通して共通の身体観を可視化し、提示した。この共通の身体観は「われわれ」＝「国民」という意識に結び付く。なぜなら、少年雑誌で示された身体観は軍や教育が理想とする身体を補完するものであったからである。国家のための身体を理想とする身体観は、「われわれ」/「かれら」の区分をし、「われわれ」という共同体を形成した。同時に、身体を、理想的とされる身体へ画一化、均一化することになった。このような共通の身体観は、共同体への帰属意識を高めるものであったといえるだろう。

共通の身体観（つまり立派な軍人になるための健康な身体を理想とする身体観）が提示され、そのような身体を目指すとき、身体は「生産」のシステムに乗せられたと考えてよい。つまり健康な身体をまるでモノのように「生産」し、その身体、生命を「消費」することを目的とする戦争につぎ込む体制が確立されたということである。その身体もまた「共同体」によってのみ確認可能である。このシステムの中では個々の身体、生命は「誕生」するのではなく、「生産」される。「共同体」としての国民国家のために身体、生命が「生産」され、その「共同体」の存続のためにその身体、生命が兵士として「消費」されるのである。

近代的身体の形成は主に学校教育、軍隊など、国家の主導によって近代国民国家形成の手段として積極的に取り組まれた課題であった。少年雑誌は、その誌上に国家のために働く丈夫な身体を理想的身体像として示し、近代的身体の形成を強化していたのである。そしてこの近代的身体とは、まさにこの「生産」と「消費」のサイクルにのせられた身体だといえるだろう。

（3）否定される身体／近代化される身体

17 世紀以来、鎖国政策を続けていた江戸幕府であるが、19 世紀に入ると相次いで西洋の艦船が日本に来航、開国を要求するようになった。1853 年にはアメリカのペリーが来航して開国を要求。これを契機に翌 1854 年幕府は日米和親条約を、1858 年には日米修好通商条約を結んだ。さらにほぼ同じ内容の不平等条約をオランダ・ロシア・イギリス・フランスとも結び、日本は開国へと進んでいった。こうして西洋列強の圧力のもと日本は西洋中心の世界史に本格的に参入し、世界に統合されることになった。

世界史に参入することになった日本に必要だったのは、西洋の近代に身の丈を合わせる近代化（＝西洋化）を行うことだった。西洋と同等の文明国であることを示さなければ不平等条約は改正できない。日本は、国家の独立を守り西洋列強と肩を並べるために、近代化に精を出したのである。

文明開化は「諸外国との不平等条約改正を目的に行われた、（政府主導の）一連の啓蒙政策およびそれに関わる文化現象 」と位置づけられる。文明開化は時代の進歩を表す流行語であり、明治維新以前の事物を旧弊とするニュアンスも持っていた。つまりそれまでの風俗、習慣は「前近代的」であるとして否定し、新たに「近代的（西洋的）」な価値観が広がったのである。そこには明治維新以前の文化は「野蛮」（下位文化）であり、西洋の文化が「文明」的（上位文化）であるとの視点が存在した。そして上位文化とみなした西洋の文化を積極的に吸収したのである。

「良い」か「悪い」か。「正義」か「悪」か。「役に立つ」か「役に立たない」か。「文明」か「野蛮」か。日本人の生活習慣がこのような二項対立で測られ、「悪い」「役に立たない」「野蛮」なものは近代的ではないと切り捨てられることになった。あらゆることが近代的な二元論で考えられるようになったのである。

違式詿違条例をはじめとした法令によって日本人の風俗は改良された。西洋の視点からみて「野蛮」な生活習慣は厳しく取り締まられた。

また、近代軍隊編成のために、兵役に従事する「役に立つ」身体の形成が急がれた。「ナンバ」のような「役に立たない」とされる身体技法は矯正されることになった。

こうして近代化を支える身体、つまり国家の独立を支える日本国民としての身体が形成されたのである。

これが 19 世紀末から 20 世紀初頭に日本が遭遇したグローバリゼーション の一側面である。しかし、これを過ぎ去った過去のこととして考えるべきではない。

われわれは生をうけたときから身体を持っている（この考え方がすでに二元論的であるが）。しかし、この当たり前のように存在しているわれわれの身体は、様々な社会規範などの影響をうけながら形成されてきたものである。このことは 19 世紀末も現代も変わらない。よって現代のわれわれの身体も、さまざまな法令や政治、生活習慣、メディア

の言説によって作り上げられているのである。とくに現代社会におけるメディアの影響力は強大で、一世紀前とは比較にならないくらい大きな影響をわれわれの身体に与えている。このことに無自覚でいるわけにはいかない。

（4）体罰の起源を探る

体罰については、2012 年 12 月の大阪市立桜ノ宮高校体罰事件を契機に、体育・スポーツの現場で喫緊の課題として取り上げられることになった。体罰は、「他」の身体を「いのち」として認識するのではなく、「モノ」として認識する身体観に起因するかもしれないとの仮説から、体罰の起源について明らかにした。

日本では、近代学校制度開始以降、学校での集団秩序の維持のために軍隊の集団秩序維持の方法、つまり体罰が、軍隊経験者の体操教師らによって持ち込まれた。兵式体操の奨励は軍隊式秩序維持のモデルを補完したといえるだろう。また学校管理の上でも、この軍隊モデルは「先輩・後輩」関係という「支配―被支配」関係を担保し、有効に機能したのである。つまり近代化の過程で、日本がそれまでに経験しなかった集団の秩序を維持する方法として、体罰の有効性が暗黙のうちに認められてきたということであろう。

現代社会における体罰も、上記の系譜を継ぐものと考えられる。教育現場でもスポーツの現場でも、年齢差などの先後関係によって「支配―被支配」の関係が生み出される制度が今も継続されている。そして集団の秩序維持のための指導や教化が行われるのだ。

ではどうすれば学校やスポーツ現場での体罰を根絶することができるだろうか。体罰の起源を確認したうえでは、教室での集団教授、秩序維持のための「支配―被支配」関係の構築、年齢段階=発達段階を前提とした学校制度、このような近代教育制度そのものを問い直す必要があるといえるだろう。

（5）オリンピックのもたらす身体観・社会観

2013（平成 25）年 12 月 6 日は、特定秘密保護法が成立した日として記憶にとどめておきたい。恣意的に拡大解釈が可能な法律が施行されることに、言論、行動、思想の自由などが制限されるのではないかという不安を覚える。戦前の治安維持法のような言論弾圧、思想統制への糸口にならないことを望むしかない。

治安維持法（1925（大正 14）年）は、関東大震災（1923（大正 12）年）後の混乱を治めるために「治安維持ノ為ニスル罰則ニ関スル件」という緊急勅令を前身のひとつとしている。治安維持法は、国体の変革と私有財産制度の否認を目的とする結社や行動を処罰するために定められた法律だが、「治安維持」を口実に、政府にとって都合の悪い考えや運動を取り締まるものだった。改正のたびにその適用範囲は拡大し、国家の方針に従わないという理由だけで取り締まれるようになり、さらに最高刑が死刑へと刑罰も重くなった。十数万人が逮捕され、拷問や病死で数千人が（死刑ではなく）獄死したとも言われている。日本人の思想の自由を奪う法律だったといってもよいだろう。

2013 年 9 月、IOC は 2020 年のオリンピックの開催地を東京に決定した。原発事故について「状況はコントロールされている」と言及したことが招致成功に大きな影響を及ぼしたのも事実だろう。しかし「状況はコントロール」されているどころではなく、なすすべがないように思われる。オリンピック招致の際の言葉は国際公約としての影響を持つ。だからこそ体育・スポーツ関係者は、諸手を挙げて東京オリンピック招致を喜んでいる場合ではないことを自覚しなくてはならない。

治安維持法公布後、日本は戦争へと突き進んでいったが、現在の日本はどこに向かっているのだろうか。

1940 年東京オリンピックは幻と終ったが、日本が戦争に突き進んでいた時も、スポーツがナショナリズムに親和していた事実も忘れてはならない。

スポーツは人々の関心を集めるエンターテイメントである。そして 2020 年東京にオリンピックがやってくる。オリンピックは世界最大のメディアイベントであり世界最大の祝祭である。オリンピックは政治の道具であってはならない。繰り返すが、スポーツはナショナリズムに親和しやすいからだ。

2020 年のオリンピックが全体主義の下のオリンピックにならないように声を上げなくてはならない。全体主義は権力側のチカラだけでは成立しない。大衆が迎合して生まれる。だから権力の横暴に迎合せず、オリンピックが全体主義に利用されないように、声を上げ続けなくてはならない。

さらにオリンピックという祝祭はカミとのコミュニケーションの場である。だからこそ、ただオリンピックを成功させるだけでなく、カミと人類の未来について対話できる、未来に誇れるイベントにしなくてはならない。思考を放棄し、無批判にオリンピック開催を喜ぶのではなく、過去を知り現状を注視し、未来をみつめることが重要ではないだろうか。

（6）スポーツボランティア

2013 年 7 月、スイス、ローザンヌで開催された 2020 Candidate Cities Briefing for IOC Members で、麻生太郎副総理は、世界アンチ・ドーピング機構への支援強化、海外派遣の指導者数の倍増、国際スポーツにおける次世代のリーダー育成のための国際スポーツアカデミーの設立を三本柱とした新しいプログラム「Sport for Tomorrow （スポーツ・フ

ォー・トゥモロー)」について言及した 。
そして 9 月、第 125 次 IOC 総会において、2020 年の第 32 回オリンピック競技大会の開催地が東京に決定した。
安倍晋三総理は東京招致のための演説で、これまでの青年海外協力隊(JICA ボランティア）の体育・スポーツ隊員の活躍に触れた。
さらに「2020 年に東京を選ぶことは、オリンピック運動の一つの新しい力強い推進力を選ぶことを意味します。なぜならば、われわれが実施しようとしている「Sport for Tomorrow」という新しいプランのもと、日本の若者は、もっとたくさん世界へ出ていくからです。学校をつくる手助けをするでしょう。スポーツの道具を提供するでしょう。体育のカリキュラムを生み出すお手伝いをすることでしょう。やがて、オリンピックの聖火が2020 年に東京へやってくる頃までには、彼らはスポーツの悦びを 100 を超す国々で 1000 万になんなんとする人々へ直接届けているはずなのです 」と、「Sport for Tomorrow」について述べた 。安倍総理のスピーチが、2020 年東京招致決定に重要な役割を果たしたと評価する海外メディアも多い。
スポーツを通じた国際協力、国際交流を行うために注目されるのが JICA ボランティアである。しかし JICA ボランティアへの応募者は減少傾向にある。そこで、グローバル人材の育成を促進したい大学と、ボランティアを確保したい JICA が連携し、ボランティアを派遣する事業がはじまっている。コスタリカ、ペルー、エルサルバドルを調査した結果、各国ともスポーツを通じて、健全な青少年の育成したい、スポーツによって社会に通じる立派な人間を育てたい、というスポーツへの期待があった。また、野球や卓球といった個別のスポーツ種目の技術移転だけではなく、体育、健康教育を促進する体育のボランティアへの期待も高かった。つまりスポーツボランティアは必要とされているのである。
Sport for Tomorrow や JICA ボランティアは国家事業であり、国家対国家の国際関係で行われる。また、スポーツボランティアの活動は、JICA、大学双方だけでなく、両国家間の国際関係を良好にする外交手段でもある。
さらにスポーツボランティアを通して国家間の連帯を強固にすることは、スポーツが国境という壁を容易に乗り越える力があることを示すだろう。スポーツには国境がないといわれるが、スポーツボランティアは、まさに国境を越えた連帯、人と人との交流が可能な活動である。そこに、近代スポーツの論理を超えた、ポストグローバル社会のスポーツのあり方があらわれるのではないだろうか。

（7）まとめ
現代の身体観の起源は、明治期以降の国家によって形成された近代的身体に行きつく。つまりそれは近代システムに適合する身体であり、とくに健康で、兵士として戦える身体が理想とされた。現代の身体観は、近代的システムに適合する近代的身体の延長線上にあるといえよう。
現代社会における体罰も同様である。近代教育システムのなかで、軍隊の影響を受けながら醸成された体罰をなくすには、集団教授や年齢の先後関係にとらわれない、新たな関係性の中でのスポーツ指導のあり方を考える必要がある。これまでと違った教育や指導のシステムや思想の構築が求められるのである。
2020 東京オリンピック開催に際して、我々が思い出すべきは、1940 東京オリンピック返上であろう。戦争に突き進む中で開催を返上したオリンピックであるが、当時と現代の社会・政治状況の類似も指摘されている。だからこそ、明治以降の近代的身体の行き着いた全体主義的な、国家に向かう身体観から解放されることが、いまもなお必要である。
そのひとつの視点が、グローバルな身体といえよう。国境を越え、スポーツボランティアを行う身体は、まさに、ポストグローバル社会の到来を待っているかのようである。
20 世紀末からのグローバリゼーション の渦中にある現代社会では、様々な価値観が飛び交っている。だからこそ、われわれは自身の身体に向き合う必要がある。
われわれの身体は今どのような状況にあるのか。われわれの身体をどのように思考（志向）するべきなのか。
このように、われわれの身体を考えることは、いま、ここにある未来の身体（われわれ）へと続く課題である。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 4 件）
①松浪　稔、日本における近代的身体観の形成　－軍・教育・メディア－、スポートロジィ 2、21 世紀スポーツ文化研究所 みやび出版、査読無、2013、47-69

②松浪　稔、日本における近代的身体観の形成　－軍隊・教育・メディア－、神戸市外国語大学研究年報 50、神戸市外国語大学外国学研究所、査読無、2013、73-84、https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1777&item_no=1&page_id=13&block_id=17

③ MATSUNAMI, Minoru 、Formación del concepto de cuerpo moderno en Japón : ejército・educación・medios de comunicación、神戸市外国語大学研究年報 52、神戸市外国語大学外国学研究所、査読無、2015、59-64、https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1921&

item_no=1&page_id=13&block_id=17

④松浪　稔、Sport for Tomorrow とスポーツボランティア －コスタリカ、ペルー、エルサルバドルの調査から－、外国学研究 91、神戸市外国語大学、査読無、2015、73-90、https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2014&item_no=1&page_id=13&block_id=17

〔学会発表〕（計６件）
①松浪　稔、『スポーツする文学』が語るスポーツ文化とは、21 世紀スポーツ文化研究会第 73 回例会、2013 年 6 月 29 日、奈良教育大学（奈良）

②松浪　稔、スポーツと暴力 体罰－その起源を探る－ 日本の教育制度と体罰、第 17 回東海大学健康・スポーツ科学セミナー、2013 年 7 月 16 日、東海大学（神奈川）

③松浪　稔、ドーピングの現在を考える、21 世紀スポーツ文化研究会第 77 回例会、2013 年 11 月 2 日、神戸研究学園都市 UNITY（神戸市外国語大学）（神戸）

④松浪　稔、青年海外協力隊で君の星を探さないか ～協力隊体験者を囲んで体験談を聞こう～、第 30 回望星学塾　湘南望星ゼミナール、2014 年 10 月 22 日、東海大学（神奈川）

⑤松浪　稔、オリンピックを壊すもの？、21 世紀スポーツ文化研究会第 92 回大阪例会、2015 年 9 月 26 日、大阪学院大学（大阪）

⑥MATSUNAMI, Minoru、The Stadium: Monument of the Olympic Games、11th INTERNATIONAL SESSION FOR EDUCATORS AND OFFICIALS OF HIGHER INSTITUTES OF PHYSICAL EDUCATION、International Olympic Academy、Ancient Olympia(Greece)

〔図書〕（計２件）
①松浪　稔、否定される身体／近代化される身体、森話社、瀬戸邦弘ほか編、近代日本の身体表象、2013、145-170

②松浪　稔、体罰の起源を探る-日本の教育制度と体罰-、黎明書房、松浪　稔ほか編著、スポーツ学の射程　「身体」のリアリティへ、2015、50-60

〔その他〕（計４件）
①松浪　稔、未来に誇れる東京オリンピックに、ひすぽ 87 号（スポーツ史学会・会報）、スポーツ史学会、2013、1-2

②松浪　稔、スポーツで文化交流を、スポーツ国際青年 16 号、体育・スポーツ帰国隊員の会、2015、5

③松浪　稔、ディストピアのオリンピック、ひすぽ 92 号（スポーツ史学会・会報）、スポーツ史学会、2015、5-6

④松浪　稔、国際協力に必要な相互理解 スポーツは異文化交流への近道、東海大学新聞 1034、2016、5

６．研究組織
(1)研究代表者
松浪　稔（MATSUNAMI, Minoru）
東海大学・体育学部・教授
研究者番号：９０３６４１５８

(2)研究分担者
久保　正秋（KUBO, Masaaki）
元　東海大学・体育学部・教授
研究者番号：３０１１９６７２

(3)連携研究者
松本　秀夫（MATSUMOTO, Hideo）
東海大学・体育学部・教授
研究者番号：４０２５６１７８

井上　邦子（Inoue, Kuniko）
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：４０２７８２３９